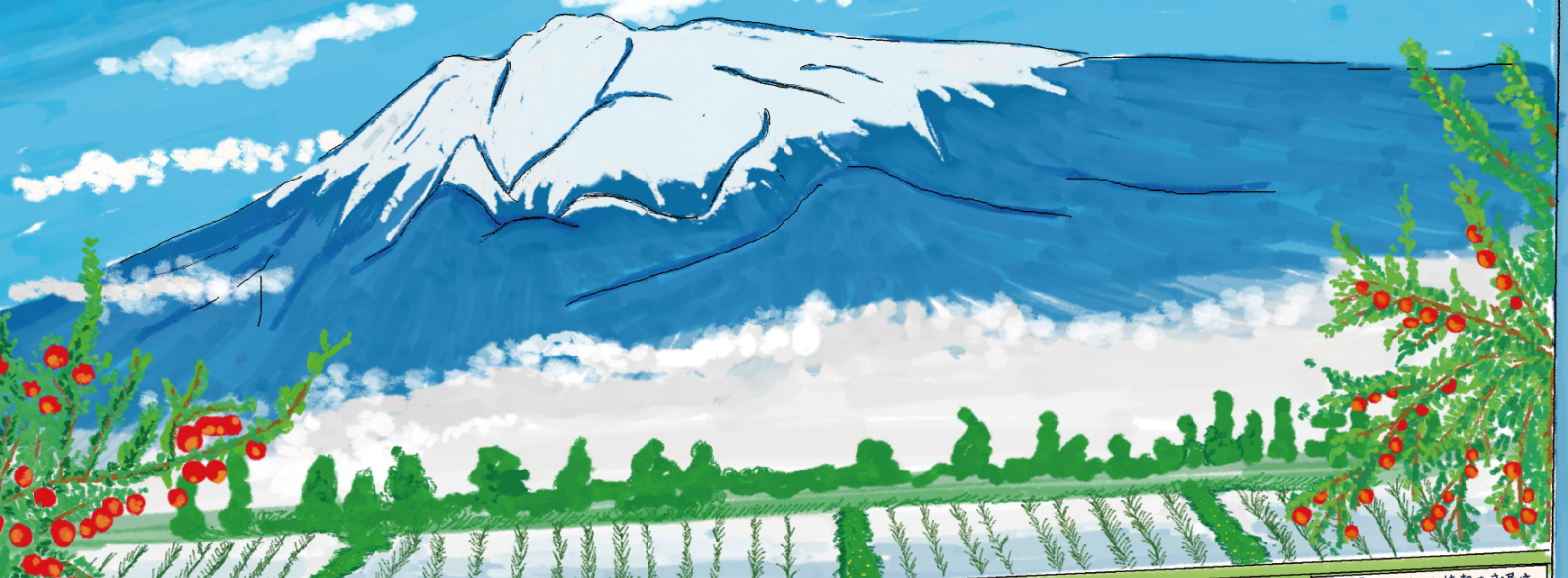




帰省するつもりで訪れる青森県

めい 大郎

第二巻



CAFE DES Gitanes 自家焙煎

もぐらや

古書と新刊
らせん堂
青森市新町 和田ビル1F

地域の心ばかりお菓子
星羊社
あおむらび
管装所
南甲子ニスコートそば

みねと町のバー
再会
H.P. 中野野 さま
1025年 2月 10日

青森県内あちこち 情報をお届け
グラフ青森
青森の暮らし、好評発売中です



てんき風呂

ホヤ銀



めぐろかわら

めぐろ太郎

帰省するつもりで訪れる青森県

第二巻

はじめに

あの人に再び会いに行こう

ある旅先で、酒場の古く重い木の扉を押し開けると、

いつからかカウンターの向こう側から「お帰り」の音がするようになりました。

私には家族とともに根を張って暮らす町が別にある。

けれど、何度目かに訪れたその町で、

「そうだ、帰ってきたのだな」と、ほだされ、心地よさを覚えていくのです。

二回目より三回目、三回目よりも四回目……と、「お帰り」に感じる親しみは、どんどん深くなっていきます。

……「ただいま」。

明日は早起きして朝市をめぐる。朝食はあの食堂でとろう。

そして、銭湯絵のきれいなあの湯で温まろう。

夜はまたこの酒場に戻ってこようか。まだまだ話し足りないことがある。

ほんのひとときだけとその町の生活の一部に溶け込んで暮らす。

まるで、各地にみなとを持つ船乗りみたいな旅…。

世界中の港という港をめぐり、さまざまな荷をおろし、何年目かに再びこの町にたどり着いた船員、あるいは、遠い海で色とりどりの魚を釣り、それをたくさん売ってお金をためて帰ってきた漁師。彼らのような船乗りが、錨をおろし久々に地を踏んだとき、

故郷のように迎え入れ、寄り添ってくれる人たちの「お帰り」は、どんなふうに響いたのでしょうか。

町と旅の数だけ紡ぎ出されるであろう、「お帰り」と「ただいま」の物語。

私は船乗りではないし、根無し草の旅人でもないけれど、

旅に夢を見るのは、遠く離れた町で自分を待っていてくれるかもしれない人たちに思いを馳せるから。今回の青森県の旅では、いくつの「お帰り」を受け取ったでしょう。

シャイで言葉少なながら、ひとたび打ち解けると、情熱的でロマンチックな一面をみせる、

そんな北国の人たちが

短いひと夏の景色に柔らかな風を吹き込み、凍てついた白銀の世界に鮮やかな色彩を与えてくれました。

2017年に刊行した『めぐ太郎』に引き続き、

帰省するつもりで訪れてほしいという思いを込め、郷土の魅力を一冊の本に編みあげました。

「ただいま」といって訪れられる町へ、

あの人に再び会いに行く旅へ、今こそ出掛けてみませんか。

目次 4

特集 タベはあずましいカウンターで 13

横丁（青森市古川）／ごじゃらし（青森市古川）／ラ・モルテ（青森市長島）／河庄（青森市堤町）／再会（八戸市小中野）
 ／土紋（弘前市代官町）

一杯のコーヒーを飲みながら 53

マロンでブランチを… 54

エッセイ 自家焙煎の珈琲店マロンと『マロンパピエ』 中村妙 56

歴史 個人で営まれる喫茶店が愛されている県 そこにはいつもコーヒーの香りが漂う 60

焙煎香に引き寄せられて… 一杯のコーヒーが結びつける縁（カフェ・デ・ジターヌ） 66

Coffee break 青森県のめい郷土甘味 70 / 青森愛を育む郷土本 72

今純三の余韻を求めて 南陀楼綾繁 74

青森県の水辺に行く 水辺の文化史 83

伝統文化 弘前・桔梗野 下川原焼土人形——土淵川のほとりで生まれた伝統玩具—— 84

特別企画 あおもり暗渠散歩 暗渠マニアックス 92

朝早くから街中で温泉の湧く銭湯を味わうことができる青森県 110

エッセイ 温泉つていいなあ… それは地球からのあつたかい贈り物 下池康一 112

コラム 浅虫温泉という桃源郷 118

アジサイの詰め込まれたグラスと浅虫に蛍の舞う夜 (古民家カフェ・アプリコット) 124

北国 湊町の物語 131

湊町の賑わいと花街の記憶——八戸・小中野遊廓を歩く—— 134

エッセイ 小中野育ち 大谷能生 150

青森駅前、戦後飲み屋史に酔う フリート横田 160

アンソロジー 故郷に寄せて 月永理絵／一戸実／木村イオリ／須藤早耶加／オラシオ 167

——ミニコラムとショートエッセイ——

■ 青森飲兵衛の豆知識コラム 22／40／50／109

■ エッセイ 「弾き語りの居場所」スーマー 42

■ 旅情をかきたてる珠玉の一本——青森市安方「佐藤商店」に聞く——日本酒からシードルまで 46

■ 青森県の新田マーケットを行く 51／52／82／130／158／159／166

■ 「二日酔い」じゃんがらブルース——浅虫篇—— 星山健太郎 128



青森県の基本データ	
人口	1,246,291人
・青森市	275,786人
・弘前市	170,556人
・八戸市	223,338人
面積	約9,645 km ²
2019年10月1日現在	

下北地方

陸奥湾

太平洋

三上北地方

八戸市

岩手県

大間町

川内町

平内町

恐山

むつ市

東通村

横浜町

野辺地町

小川原湖

三沢市

十和田市

五戸町

十和田湖

田子町

三陸海岸
八戸線

マグロ

アンコウ

ウニ

ミズダコ

ウニ

ヒラメ

ウニ

大湊線

菜の花

ナマコ

タイ

イカ

イカ

鯖

ホヤ

牛乳

馬刺し

にんにく、あすなろ卵

青森県ってこんなところ！ 県内特産品早見地図

津軽海峡

佐井村
ウニ



マグロ

今別町
イノシシ



十三湖
しじみ



津軽線

外ヶ浜町
トゲクリガニ



ホタテ

青森市 浅虫

カシス

日本海



鰺ヶ沢町

五能線

つがる市

五所川原市

鶴田町
スチューベン



津軽地方

津軽海峡

岩木山



リンゴ



田舎館村
たんぼアート



黒石市



糠きみ、清水森チンパ



平川市
平川牛



大鰐町
大鰐温泉もやし



深浦町

十二湖

西目屋村

白神山地

秋田県

至・能代駅↓

至・東能代駅↓

奥羽本線



■ 専代主神社

■ 合浦公園

● (港町)

■ 東北電力

● (青柳)

石森橋

柳原遊廓跡地

★ 目安★

今純三アトリエ跡地

● (本町)

■ 青町小学校

● Hyu ベーカリー

青森駅からここまで、約4km。車で15分、徒歩で45分ほど！

■ 塩町遊廓跡地

■ トド湯

■ 青柳橋

● 後藤食堂 (焼きそば)

● 武内製船所 (津軽船)

● 甘栄堂 (バナナ最中)

● やきそばすずき

● (茶屋町)



至・浅虫→

■ 青森市文化会館

■ 堤橋

青森市 ザックリお散歩マップ

国道

■ 諏訪神社

■ NTT

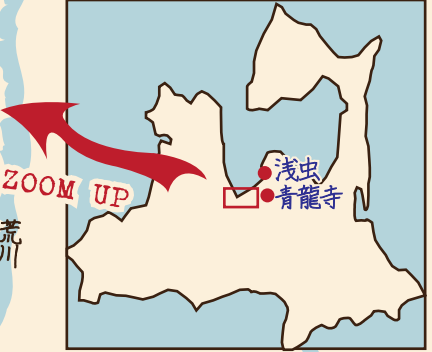
● 河庄

● 誠信堂書店 (古書)



■ 平和公園

■ 棟方志功記念館



ZOOM UP

■ みちのく銀行

■ 青森市民病院

荒川

■ 八甲田大橋

青い森鉄道

■ 青森高校

■ 筒井中学校

● コノハト (お茶専門店)

■ 成田本店

● サンロード青森

● タムラ (焼きそば)



● (緑)

● 徳の湯

● 自家焙煎珈琲店 ちえの美

■ 筒井駅



● まんげつ (SAKE BAR)

■ 浜田小学校



至・八甲田山↓



★目安★
 青森駅からここまで、約4km。車で15分、徒歩で45分ほど！

●しょう太 (焼きそば)

工場・倉庫街

馬淵川

八戸大橋

小中野第二魚市場

館鼻岸壁朝市

くまざわ書店
イトヨーカドー

(旧・湊駅駅舎)
みさぎ通り公園

新井田川

丸一河村(毛皮)
八戸酒造 市営魚菜
陸奥男山 小売市場



★目安★

本八戸駅から小中野駅まで徒歩約25分。約2kmです!

ショッピングセンター
ラピア

木村書店

ソウルプランチ

再会

小中野小学校

アンバーコーヒー

新地

新心づ旅館

小中野駅

八戸線

魚藍山常現寺

ユニバース
(八戸名物が現地価格)

卵湯
甲文醤油

みどり温泉

本八戸駅

八戸城跡

八戸城 角御殿表門

安藤昌益資料館

カネイリ番町店(書店)

はっちマチニワ

六日町

八戸ブックセンター

みらく横丁

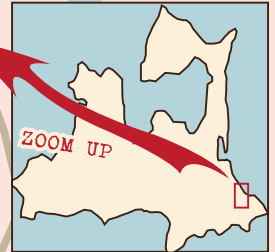
AND BOOKS

温泉みちのく

ニュー朝日湯

芭蕉堂公園

伊吉書院 類家店



八戸市そぞろ歩き
湊町の風情を楽しむマップ



■ 弘前市緑の相談所 (前川国男設計建築物)

■ 弘前城

■ 弘前中央高校
(講堂が前川国男設計建築物)

廓跡地

■ 弘前工業高校

● 可否屋葡萄満

● 川越黄金焼店



山中黄金焼店

■ 弘前市民会館 / 市立博物館
(前川国男設計建築物)

■ 弘前城三の丸追手門

● rotto
(アンティーク&カフェ)

● 土紋

■ 三上ビル

● 川越黄金焼店

(代官町)

■ 弘前市役所庁舎
(前川国男設計建築物)

土手の珈琲屋
万茶シ

■ 中三弘前店 (百貨店)
ジュンク堂書店

■ 弘前市立図書館

● 旭松堂
(バナナ最中)

(土手町)

■ 弘前中央食品市場
中土手魚菜センター

● じゃっぱりラーメン



イトーヨーカドー

■ 弘前大学
医学部付属病院

弘前駅

● 弘前ごぎん研究所
(前川国男設計建築物)

肉の富田
(カツサンド)

つきや
(手芸、ごぎん刺し資材)

虹のマーケット
(弘前食品市場)

■ 弘前市立病院
(前川国男設計建築物)



■ 弘前高校

弘前市 城下町ぶらり探索マップ



弘高下駅

弘南鉄道大鰐線



■ 太宰治まなびの家
(太宰の下宿先)

■ 弘前病院

■ 弘前大学附属図書館

高谷下川原焼土
人形製陶所

(桔梗野)

● 桔梗野温泉



● けやぐの家





白菜漬
¥1000

大根漬
¥

めん漬
¥



夕べはあずましいカウンターで

あずましい〓居心地が良い

地元でも、旅先でも

行きつくのは

魅力的な店主が迎えてくれる

あずましいカウンター

至高の一杯にあやかろう

今夜、あなたは

どのカウンターを目指しますか

古川の横丁歩けば べの蕎麦が恋しい夕べ



ここにくると、最後のべ蕎麦をゴールにして晩酌の計画を立てることになっている。晩秋のころ、とつぷりと暮れた古川のニコニコ通りから路地を眺めると、看板に灯がともっていた。

青森駅からも近い古川のこの界隈、戦後はヤミ市が形成された。その名残は私の幼少期の記憶の片隅にもある。一度踏み入れると迷子になってしまいそうな小さく複雑な路地。磯のにおいとりんごの青いにおいの染み込んだ、薄暗く湿ったアスファルト。冒険心がかきたてられ、なにか宝物を見つけられそうでワクワクしたのを覚えている。駄菓子問屋で買ってもらった昔ながらのくじ付き菓子「あん玉」は、そんな宝物のひとつだった。

「横丁」は現在の三代目ご店主の祖母おばあさんが昭和28年に屋台として創業したという。青函連絡船を待つ客、とにかく酒をかくくらくらって温まりたい客、小さな店が星の数ほどひしめきあう町の一角で、「横丁」は産声をあげた。

その日、先客はまだ誰もいなかった。6席ほどあるカウンターのおでん鍋の目の前に座る。磨かれたテーブル、曇りなき蕎麦打ち場のガラス窓、椅子は等間隔に並べられ、すでに各座席の positioning

に袋入りの箸がセットされている。店の口開け、これから出陣する武士のように、ぴりっと引き締まった雰囲気醸し出す店はいい店だなと思う。

まず一杯目にサッポロの赤星を注文したあとは、目の前にあるおでん鍋から気になるネタをピックアップしようか。青森のおでんといえば、生姜をすり下ろした味噌ダレをかけて食べることで知られていて、横丁でも夏季にそれを食べることができ。晩秋のころは既に冬季の献立へと切り替わっており、魚介出汁のきいた熱々のおでんに練り芥子を添えていただくのが恒例だ。いずれにしても出汁には深いコクがある。故郷を離れてみてわかったのだが、青森のおでんにはツブ貝が入っている。ツブの出汁が、おでん汁に特有の味わいをもたらし、五臓六腑をいたわるように温める。そして（これも関東圏ではなかなかお目にかかれないのだが）蕎^{そば}が入っており、そのほろ苦さもまた、ならではの風味を加えている。ツブに蕎、そして五目巾着と大根、ロールキャベツを選ぶ。ほかほかと湯気をたてるネタを頬張り、赤星で喉を潤すと、「ああ、至福だなあ」となる。出汁をよく吸ったロールキャベツのくったりとした葉の食感がたまらない。

赤星を飲み干したら、やはり、蕎麦に向けて地酒でエンジンをかけていきたい。メニューを眺め、まずは三浦酒造の豊盃の特別純米酒を注いでもらい、おでんの続きを…。途中で追加したホタテフライのジュシーでほろほろの柔らかい舌触りも楽しみ、陸奥湾の恵みと、岩木山がもたらす豊かな水に心から感謝する。そうしているうちに乾いた盃。手持無沙汰に次の地酒をどうしようか考えていると、「どんなのがお好きですか」とご店主。自分の好みを伝えると、ふむふむとうなづく。ふとカウンターから姿を消し、どこからともなく一升瓶を抱えて現れる。あるいは店舗裏の巨大冷蔵庫に銘酒のコレクションが眠っているのではないかと、…、想像は膨らむが、その知識をもって、本日

の酒飲みの気分に応じてくれるコンシェルジュさながらで、「たまたま入った限定酒」を注いでくれる。なんとも贅沢なことだ。

「そろそろ蕎麦をおつくりしましょうか」と尋ねられ、はたと腹七分目に達していたことに気づく。やや食べ過ぎたようだが、胃袋はニコニコと笑っていた。

高校卒業後すぐに日本三大蕎麦処・戸隠に修行に出たというご店主。学友のほとんどが大学進学するなか、蕎麦修行を選択したとき、教師はじめ周囲の大人たちはこそぞって驚いたことだろう。「あてがあつたわけではないんですけど、学校の長期休暇を利用して飛び込みで引き受けてくれる先を探していたんです」。行き当たりばったりではあつたが、縁があつて、とあるお店で修行をさせてもらえることになつたという。二代目の急な引退にあたり「思ったよりずっと早くこの店を継ぐことになりました」というが、どっしりと頼もしく、ぴりっと筋が通つた立ち居振る舞い、店全体から醸し出される空気の所以が垣間見えた気がした。

ここの蕎麦が戸隠ならではの「ぼつち盛り」である理由と、若かりしころの修行の話を聞くと、何度も食べている蕎麦の香りはより深く、カウンターから見える景色はより鮮やかな色彩を帯びて私のなかに飛び込んでくる。初代が立ち上げた横丁も、二代目が継いだ横丁も、町の飲兵衛の心休まる居場所だつたに違いないのだが、そこに吹き込まれた三代目の気概が今、古い町の夜の路地を明るく照らしている。

そういえば、ちょうど新蕎麦の季節だっけな。

(いせ)



◆ 横丁

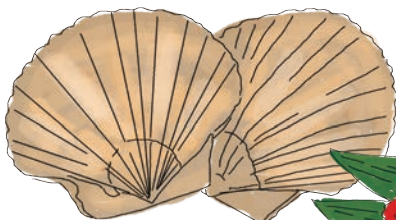
住所…青森県青森市古川1-13-6

定休日…日曜・祝日



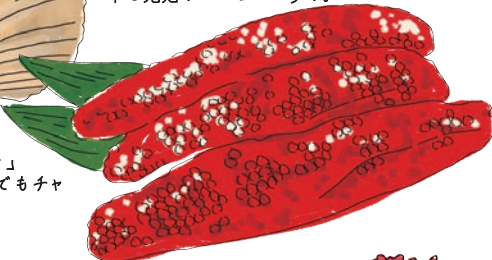
昭和30年頃の青森ねぶた祭の様子

アウガ新鮮市場



陸奥湾の活ホタテ貝。殻だけでも販売しているのが、青森名物「貝焼きみそ」の器として購入するのもよし。自宅でもチャレンジしてみよう。

お土産にも人気の筋子。新鮮だから色が鮮やかで塩加減も絶妙。筋子・タラコ・イクラの専門店「内山商店」は特に人気らしく、午前中で完売していること多し。



田子ブランドのニンニクもいいけれど、田子町の近隣でとれたちょっとお安めのニンニクもねらい目。



ホヤは新鮮なものをその場で剥いて食べさせてくれるお店もある！ワンカップ片手に歩きたくなる。



軽くてお手頃なのでいつも購入する正根商事（大間町）のとりろ昆布「ねばりとろろ」。



県産のリンゴやリンゴを使ったお菓子の販売店も。

青森市でお土産買うなら
青森駅前市場が便利
 もともと界限にバラック建てで広がっていた市場が駅前施設「アウガ」地下に入居したのは2001年のこと。アウガ新鮮市場といえ、在来線で新幹線駅の新青森に向かう前、帰り際のお土産探しにうってつけ。毎回購入するのは、大間町の正根商事のとりろ昆布30グラムの小袋、そして、「田子のニンニク」ならぬ、田子町の近くでとれたニンニク。田子ブランドがなくても上等な品が並んでいます。近隣にある「のつけ井」（各商店から好きな食材を買い歩き、カスターマイズした海鮮丼）でおなじみの「青森魚菜センター」（古川1丁目）とあわせて立ち寄ってみたい。

あおもり古書市



昔ながらの紙芝居の読み聞かせイベントも。



古書市を囲むように、県内の古道具屋さんのテントも集結！可愛らしいアンティーク玩具も。



会場は明治41年建築の青森市森林博物館。



什器にリング箱を使う出店者が多いのも青森ならでは！



リングノートづくりのワークショップ。好きな表紙、好きな紙を選んで組み合わせる。

ひと箱古本ブースには個人の出店者、県内・近隣の古書店主が出店。地元出版社も自社の新刊・既刊を出品している。青森市ならではの古書市。

青森市の歴史的建造物で
掘り出し物を探しだす
八戸市には「八戸ブックフェス」というブックイベントがあります。が、これまで青森市にはありませんでした。イベント企画に立ち上がったのは、青森駅前ラビナの雑貨店「三ノ月舎」を営む山口さんご夫妻。2019年7月に第一回が開催されました。会場は明治41年建築の青森市森林博物館。鬱蒼とした緑に囲まれた歴史的建造物内に古書ブース、地元出版社のブースなどが並び、庭にはコーヒースタンドやアンティーク雑貨のテントが出店。子どもも楽しめるプログラムも組み込まれており、老若男女が訪れ、大盛況となりました。第二回の開催も待ち遠しい！

八食センター



酒類販売コーナーの一角にある利き酒カウンターでは、「津軽びいどろ」のおちょこに、各種日本酒を注いでくれて 300 円。青森県および近県の地酒が目白押し！



ひものバラエティセット！その量たるや。3500 円でこの枚数は素晴らしい！

三陸産のホヤ



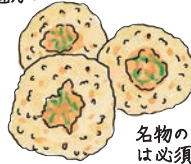
子持ちトゲクリガニ



名物の「うに飯おにぎり」は必須。ウニ入り炊き込みご飯のオニギリ。



「立ち食いコーナー」を設けている商店も。岩手県産のウニや八戸産の「シメサバユ」「タコの白子」(?!) などの珍味も。日本酒片手にめぐってしなくなる魅力！



青森県内、そして三陸から
美味しい食材が★集結
1980年開業の同施設には、魚介類を中心に、乾物、珍味、地酒、郷土菓子などを販売する約60店がぎっしりと入店。
施設内には、地酒の利き酒コーナーのほか、購入した食材を七輪で焼いて食べられるエリアがあり、のっけ丼（各商店から好きな食材を買い歩き、カスタマイズした海鮮丼）のサービスマイズも人気だそうです。気ままにぶらりと訪れても楽しめる、酒池肉林の夢を実現したかのような食の一大テーマパーク！
最寄り駅は八戸線の長苗代駅であるが、八戸市中心街（六日町）や八戸駅からお得なバスも出ているので利用されたい。

湊町の賑わいと花街の記憶 八戸・小中野遊廓を歩く



大正時代初期に撮影したと思われる新陸奥楼（現・新むつ旅館）店舗前での集合写真。
このころ、最後列に立つ女性たちに見られるような「ハイカラさん」と呼ばれる箱髪にリボンをつけるヘアスタイルが流行

八戸・小中野遊廓「新むつ旅館」という白屋敷

2019（平成31）年2月初旬。八戸には空っ風と呼ばれる寒風が吹き込み、肌感覚がなくなるほどだった。昼下がりに、本八戸駅からタクシーを拾う。みなとまち湊町の盛衰の歴史とともに歩んだ「八戸遊廓」の痕跡を探して小中野へ向かう。八戸遊廓とは、主に「鮫」と「小中野」に発展した遊廓街の総称である。なんでも、小中野ではかつて貸座敷（妓楼）として営まれていた明治時代の建物が今も健在という。

小中野小学校の前を過ぎ、さらに新井田川方面へ進むと「小芳」という廃業してしまっらしい居酒屋の角を右に折れる。そこからまっすぐ伸びる道、突き当りまでの約200メートルは「新地」と呼ばれる。明治期に貸座敷「新陸奥楼」として創業し、1958（昭和33）年の売春防止法施行以降旅館として営まれている「新むつ旅館」（小中野6丁目）は、この「新地」と呼ばれる場所に佇んでいた。

タクシーを降り、見上げると、大型の切妻屋根に、なだらかに湾曲した起り破風の木造二階建てが印象的だ。随所に改修を施しているものの、明治時代の面影がそのまま残っている希少な建物。文化庁によって指定された登録有形文化財の標識を横目に見ながら、ガラスの引き戸を開け、土間に入る。靴を脱ぎ踏み入れると、ミシミシという音を立てる床はひんやりとしている。壁は特有の艶をたたえていた。

入ってすぐ右手には、黒光りしたY字階段が存在感を放っていた。伝統技術により手すりには釘を使っていない。Y字の先は2階の東側廊下、そして西側廊下へ分かれていた。さらに見渡すと2階の東側と西側とが空中回廊で繋がっている。当時にして大変な建築費をかけたに違いない。旅館は二階建てではあるが、空中回廊よりもっと高くまで吹き抜けており、てっぺんに正方形のガラス窓がはめ込まれている。2月の灰色の太陽光がガラス窓を通してこぼれ、私をぼんやりと照らす。長い年月によって醸された空気にぞくぞくと気圧された。

「いらっしやい。寒かったでしょ〜」。静寂を破るような明るい声で出迎えてくれたのは、女将の川村紅





新むつ旅館の外観。2019年撮影。格子造りの窓（上ミセ）から女性たちが顔をのぞかせたという

美子さん。広間の電灯が点くと、はつと我に返った。

新むつ旅館の歴史

「すぐお部屋で休みますか？ それとも…」。女将さんが指差す広間のテーブルのうえには、墨で「遊客帳」、「来客名簿」、「大福帳」と記された勘定を記す年季の入った分厚い帳面、これまで受けた取材の記事などが山積みになっている。奥の棚には、男根の形をした御神体がいくつも並んでいる。

娼妓たちがお客がいないうちに、紐に括り付けた御神体を引っ張りまわしながら楼内を歩き回って来客祈願をしていた、なんていうエピソードも残っている。

八戸遊廓とは、八戸の湊町である「鮫」と「小中野」に発展した遊廓街の総称だ（『全国遊廓案内』より）。女将



八戸市営魚菜小売市場

八戸といったらやはり鯖にはありつきたい！「カッチャ」(おかあさん)たちが調理した焼き魚で、湊町の朝食を堪能。ビールも販売！

市場のなかの商店から手軽な大きさの刺し身パックを購入。これがまた新鮮で上等！

ほかほか鯖塩焼き

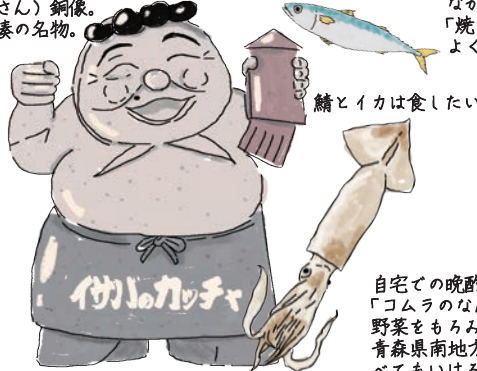


焼きうに



陸奥湊駅前の「イサバのカッチャ」(魚売りのお母さん)銅像。湊の名物。

アワビの殻の器のなかに入れ蒸し焼きにした「焼きうに」。三陸の名物で、陸奥湊ではよく見かけた。焼くことで甘味が増す。



鯖とイカは食したい



自宅での晩酌用に、「コムラのなんばんみそ」野菜をもちみに漬けた。青森県南地方の漬物。ご飯にのっけて食べてもいい。

焼き鯖と刺し身パックで
至極の朝食セット

八戸線の陸奥湊駅前にある市営魚菜小売市場。新むつ旅館に宿泊した次の日に朝食目当てで訪れました。「朝めし処魚菜」で、熱々のごはんとはんと味噌汁を注文し、紅サケ、マグロのカマ、カレイや鯖などの焼き魚数種類、納豆や手作り惣菜などのバラエティから、自分で定食をカスタマイズ。湊の新鮮な刺し身が食べたければ市場内の商店から買ってくるとよし。焼きたての鯖のジュシーな脂、そして、いうまでもなく新鮮な刺し身で至極の朝食を堪能できるのは湊ならではのところ、我慢するのが精一杯のひとときでした。

めぐ太郎 第二巻

発行人 星山 健太郎

編集人 成田 希

印刷 株式会社 シナノ

2019年12月15日 初版発行

発行所 株式会社 星羊社

〒231-0045

神奈川県横浜市中区伊勢佐木町1丁目3-1 イセビル 402

tel 045-315-6416

fax 045-345-4696

HP <http://www.seiyosha.net>

mail info@seiyosha.net

ISBN 978-4-909991-01-0

C0026 ¥1500E

定価： 本体 1500 円＋税

© SEIYOSHA 2019, Printed in JAPAN

禁・無断転載

万一、乱丁落丁があった場合はお取り換え致します。

